

2) 温度感受性耐性因子に関する研究

温度感受性 KM 耐性因子と fi^- の非温度感受性耐性因子の重感染

金 丸 佳 郎;

横 田 健

はじめに

1966年寺脇⁽¹⁾によって発見された温度感受性KM耐性因子Rts1 [R(KM)]について著者は遺伝学的検討を加え、今日までにRts1は fi^- 型に属し、 fi^+ 型の4剤耐性因子R₁₀₀(CM, TC, SM, SA)と同一宿主菌に重感染する時は干渉を示さず⁽²⁾、25°C~37°Cにおいて両者は安定に共存し、この場合にそれぞれの温度感受性度に影響はないが、ある条件下では、両者のrecombinantsが高率に選択され、その大部分は温度感受性であり、さらに、これから新しい温度感受性R因子がsegregateすること⁽³⁾、又Rts1因子は fi^- であるが、すべてのT-even phagesをrestrictし、phage λ に対してはrestrictionを示さないことから⁽⁴⁾⁽⁵⁾、第3グループのR因子と思われるなどを発表した⁽⁶⁾。今回は温度感受性KM耐性因子Rts1と、 fi^- の非温度感受性NR73、およびNR75-1因子との共存状態を検討したので報告したい。

材料および方法

1) 材 料

① 実験微生物

E. coli YA5 (W3630 : Rts1),
E. coli YA10 (58-161 : F⁺),
E. coli YA11 (58-161 : Rts1),
E. coli YA27 (CSH2 : Rts1),
E. coli YA31 (W3630 : NR73),
E. coli YA32 (W3630 : NR75-1),
E. coli YA33 (W3630 : Rts1 ; NR73),
E. coli YA34 (W3630 : Rts1 ; NR75-1),
E. coli W3110, *E. coli* CSH2
E. coli YA13 (W3630 : Rts2)

② 使用培地

LederbergのEMS寒天培地⁽⁷⁾, Mac Conkey寒天培地, Penassay broth

③ 薬 剂

kanamycin (硫酸塩: 武田薬品工業K.K.)
streptomycin (硫酸塩: 武田薬品工業K.K.)
chloramphenicol (山内製薬K.K.)
tetracycline (Aureo. powder; 日本レダリーK.K.)
sulfonamide (山内製薬)
PenicillinG (明治製薬)

2) 方 法

イ) *E. coli* CSH2 : R⁻, *E. coli* YA27, *E. coli* YA10 および *E. coli* YA11を recipients とし *E. coli* YA31 又は、*E. coli* YA32を donor として相互伝達実験を 25°C, 37°C および 43°C において行った⁽⁸⁾。R⁻菌に対するこれらのR因子の伝達頻度を調べれば、この方法により、Rts1の存在が fi^- のR因子、すなわちNR73、又はNR75-1の重感染にとの様な効果を示すか同時に調べることが出来る。

ロ) *E. coli* YA33, 又は *E. coli* YA34(イ)のこれを pure clone とし、薬剤を含まない Penassay broth 中に、25°C 18hours 静置培養する。これに 50 µg/ml の KM, 10 µg/ml の TC を加えさらに 18 hours 43°C に保温した。MacConkey 平板上にこれらの菌を 37°C 24 hours 画線培養し生じた colony の耐性パターンを replica 法で調べた。種々の耐性パターンを示すものについて 25°C, および 43°C でそれぞれの耐性マーカーの脱落実験を行った⁽⁸⁾。

ハ) 上記方法で recombinants が選択出来ない場合、Penicillin Screening を利用し、*E. coli* W3630 で Rts1, NR73 両方をもつもの(YA33)を 25°C, 18 hours 培養したのち、下記の如き薬剤の色々な組合せを加え、

Test tube	1	KM	50 µg/ml
	2	TC	5 µg/ml
	3	SM	25 µg/ml
	4	SA	1000 µg/ml
	5	TC	5 µg/ml, SM 25 µg/ml
	6	TC	5 µg/ml, SA 1000 µg/ml
	7	SM	25 µg/ml, SA 1000 µg/ml

さらに 25°C で 30 分振盪培養した。その後 PenicillinG 100 u/ml を加え、振盪培養を続け、4 hours, および 24 hours 後に薬剤を含まない Mac Conkey 平板上に画線し、得られた生残菌の耐性パターンを replica 法で調べた。

ニ) 若し、Rts1 と NR73 の recombinant をもつと考えられる clone が得られたなら、25°C, 37°C および 43°C で R⁻菌に対する伝達実験を行ない、co-transfer の可能性を検討した。

実験成績

イ) Rts1 因子は fi^+ 型R因子とは干渉を示さないが、

Table 1 MUTUAL TRANSFER OF THE THERMOSENSITIVE Rts1 AND fi⁻ NON-THERMOSENSITIVE NR73 (TC, SM, SA) FACTORS.

Cultured microbes	Culture temperatures			Transfer frequencies	
	Subcult.	Mixed.	Select.	Rts1	NR73
CSH2:Rts1	25	25	37	7.3×10^{-4}	—
+	37	37	37	3.3×10^{-5}	—
W3630:R ⁻	43	43	37	3.3×10^{-6}	—
CSH2:Rts1	25	25	37	8.1×10^{-5}	1.1×10^{-5}
+	37	37	37	$< 3.7 \times 10^{-7}$	1.5×10^{-1}
W3630:NR73	43	43	37	$< 10^{-8}$	7.3×10^{-3}
CSH2:R ⁻	25	25	37	—	4.2×10^{-6}
+	37	37	37	—	3.2×10^{-2}
W3630:NR73	43	43	37	—	3.2×10^{-3}

Table 2 MUTUAL TRANSFER OF THE THERMOSENSITIVE Rts1 AND fi⁻ NON-THERMOSENSITIVE NR75-1 (SM) FACTORS.

Cultured microbes	Culture temperatures			Transfer frequencies	
	Subcult.	Mixed	Select.	Rts1	NR73
CSH2:Rts1	25	25	37	7.3×10^{-4}	—
+	37	37	37	3.3×10^{-5}	—
W3630:R ⁻	43	43	37	3.3×10^{-6}	—
CSH2:Rts1	25	25	37	9.5×10^{-5}	6.5×10^{-4}
+	37	37	37	2.7×10^{-7}	2.5×10^{-2}
W3630:NR75-1	43	43	37	10^{-8}	3.0×10^{-3}
CSH2:R ⁻	25	25	37	—	3.1×10^{-4}
+	37	37	37	—	5.3×10^{-2}
W3630:NR75-1	43	43	37	—	4.3×10^{-3}

Table 3 STABILITY OF THERMOSENSITIVE Rts1 AND NON-THERMOSENSITIVE, fi⁻ NR73 OR NR75-1 IN E. COLI W3630 INHERITING THE BOTH R FACTORS

Strains tested	Culture temperature	Elimination frequencies (%)	
		Rts1	NR73 or NR75-1
W3630:Rts1;NR73	25	0.07	0
	43	99.2	0.07
W3630:Rts1;NR75-1	25	0.3	0
	43	0.85	0.5

fi⁻型の NR73 又は NR75-1 をもつ *E. coli* YA31, 又は *E. coli* YA32 に *E. coli* YA27 から Rts1 を伝達するとその伝達頻度は $1/10$ ないし $1/100$ に低下する。しかし その逆の場合 recipient に Rts1 をもっていても、もっていなくとも NR73 又は NR75-1 の伝達頻度は変わらない、すなわち片側干渉である。

又, fi⁻R 因子の Rts1 に対する片側干渉は, Rts1 の donor として *E. coli* CSH2 のかわりに *E. coli* YA10 を使用してもみとめられる。以上の方法の相互伝達実験により *E. coli* で Rts1 と fi⁻ の NR73 又は NR75-1 の両方をもつ株が得られたが、この *E. coli* 細胞中では、これら R 因子は原則としておのおの独立して存在し、

43°C の高温培養により 3 表に見られるが如く Rts1 のみが高率に脱落する。

又、非常に低頻度であるが、相互排除が見られる。しかし一般の *fi-* 型 R 因子間の相互排除にくらべ、Rts1 と NR73、又は NR75-1 の共存性ははるかに安定である。

ロ) *E. coli* YA33, *E. coli* YA34 の菌細胞中で Rts1 と *fi-* 型 R 因子との recombinant を取る目的で薬剤含有 Penassay broth 中での高温培養を行ったが、すべての subclone が KM, SM, SA, TC 耐性で、Rts1 のもつ KM 耐性と NR73 のもつ SM, SA および TC 耐性又は NR75-1 のもつ SM 耐性すべてを保有し、両者の耐性マーカーの組合さったものは 1 つもみとめられなかった。(表 4)

さらにこれらの集落 30 ケを無作意に取り出し、25°C および 43°C 培養を行ない、各耐性マーカーの温度感受

性を調べたが、その結果は 43°C で KM 耐性のみが高率に脱落し、この方法によっては両者の recombinant は得られなかった。

ハ) そこで Penicillin screening を利用して recombinant をえらぶ努力をしたが表 5 に示す如く 4 時間の Penicillin Screening により得られた生残菌は計 700 個すべて KM, SM, SA, TC 耐性であり、しかも脱落実験により Rts1 のみが 43°C で高率に落ちることから、すべての菌が NR73 と Rts1 とを重感染したもので、recombinant の R をもつものはないと判定された。

Penicillin Screening 24 時間後の生残菌の耐性パターンは約 450 個の集落を調べ、その結果大部分が KM, SM, SA, TC 耐性であったが、わずか 4 集落 KM, SM, SA 耐性であり、TC 耐性のないものが得られた。この TC 耐性のかけた Rts1 と NR73 の recombinant と想像

Table 4 SELECTION OF RECOMBONANTS BETWEEN THERMOSENSITIVE Rts1 AND *fi-* NON-THERMOSENSITIVE NR73 OR NR75-1

Strain employed	Culture conditions			Recovered colonies		R-factor
	Temp.	Time	Drugs	Resist. patterns	NO.	
W3630: Rts1; NR73	43	24	None	KM. SM. SA. TC Others	236 0	Rts1; NR73
	43	24	KM, TC	KM. SM. SA. TC Others	173 0	Rts1; NR73
W3630: Rts1; NR75-1	43	24	None	KM. SM Others	275 0	Rts1; NR75-1
	43	24	KM, TC	KM, SM Others	77 0	Rts1; NR75-1

Table 5 PENICILLIN SCREENING OF RECOMBINANTS BETWEEN THERMOSENSITIVE Rts1 AND NON-THERMOSENSITIVE *fi-* NR73

Drugs	Screening condition		No. of colonies showing following resist.-patterns	R-factor
	Temp.	Time		
KM, P _c	25	4	A11 KM. SM. SA. TC	100
	25	24	KM. SM. SA. TC SM. SA. TC	30 2
TC, P _c	25	24	KM. SM. SA. TC SM	73 3
	25	24	A11 KM. SM. SA. TC	55
SM, P _c	25	24	KM. SM. SA. TC	11
	25	24	KM. SM. SA SM	2 3
SA, P _c	25	24	A11 KM. SM. SA. TC	71
	25	24	KM. SM. SA. TC	98
TC, SM, P _c	25	24	KM. SM. SA. TC	2
	25	24	A11 KM. SM. SA. TC	55
TC, SA, P _c	25	24	KM. SM. SA. TC	98
	25	24	KM. SM. SA	2
SM, SA, P _c	25	24	A11 KM. SM. SA. TC	98
	25	24	KM. SM. SA. TC	2

Table 6 Temperature sensitivity of resistance markers in *E. coli* W3630 derivatives carrying an assumed recombinant between the Rts1 and NR73 factors

Strain name or resistance passern	Cult. temp.	Number of colonies tested					R-factor
		Total	KMr	CMr	TCr	SMr	
W3630:Rts1;NR73 (KM, SM, SA) ^{r-1} **	25	50	50	0	0	50	50
	43	50	50	0	0	50	0*
W3630:Rts1;NR73 (KM, SM, SA) ^{r-2} **	25	50	50	0	0	50	50
	43	50	50	0	0	50	0*
W3630:Rts1;NR73	25	50	50	00	50	50	50
	43	50	12	0	50	50	50

* Resistance to sulfanamide in there strain seemed to be thermosensitively expressed or inherited

** Subclones of *E. coli* W3630 carrying both Rts1 and NR73 (YA33) obtained by penicillin screening with TC at 43°C (see Table 5)

Table 7 Transfer frequencies of each resistance marker from *E. coli* W3630 derivatives carrying Rts2, or an assumed recombinant between Rts1 and NR73, at various temperatures.

Cultured microbes	Cult. temp.	Transfer frequencies (KMr colonies/donor)
YA-13 (W3630:Rts2)	25	2.9×10^{-3}
+	37	1.0×10^{-6}
W3110:R-	43	1.0×10^{-6}
W3630:KM, SM, SA	25	2.7×10^{-3}
+	37	5.7×10^{-2}
W3110:R-	43	4.7×10^{-5}

されるものについて、25°C および 43°C で R-factor の安定性を調べた結果は表 6 の如く、KM 耐性も 43°C の高温培養に対して安定で、しかも表 7 の如くその伝達頻度は 37°C が最高で、非温度感受性の recombinant と考えられることが既に得られている Rts1 と R₁₀₀ との温度感受性 recombinant である YA-13 の伝達実験と比較し明らかとなった。しかし 25°C で伝達したものは KM 耐性のみが安定であり、また、43°C で伝達したものは KM, SM, SA 耐性が安定であって、非温度感受性 recombinant であるか否か、即ち KM 耐性と SA, SM 耐性とが同一 Replicon 上に存在するか否かについては確認出来なかった。

Rts1 因子が fi⁻ 型の非温度感受性 R 因子と片側干渉を示すことは興味深く、又、低頻度ではあるが相互排除が見られることは、fi⁻ R 因子と Rts1 との重感染の特長と考えられる。Rts1 と fi⁻ 型 R 因子両方も W3630 細胞中では、それら R 因子は原則として独立して replicate

し、お互いにそれぞれの温度感受性に影響を与えない事は、Rts1 と R₁₀₀ (fi⁺) の重感染の場合と同様である。fi⁻ 型 R 因子と Rts1 との間の recombination は fi⁺ R 因子と Rts1 との recombination にくらべるかに起りにくい様に考えられ、又、recombinant と考えられるとしてもその結合は極めて不安定の様である。この点については更に検討したい。

本研究は昭和44年6月13日、14日に開催された第22回日本細菌学会関東支部例会に発表された。

引用文献

- TERAWAKI, Y., H. TAKATSU, AND T. AKIBA. (1967); Thermosensitive replication of a kanamycin resistance factor. J. Bacteriol. 94 : 687-690
- 横田健, 有泉昇, 金丸佳郎, 森礼子 (1967): 温度感受性 R 因子に関する研究第 1 報 同一宿主細胞内に非温度感受性 R 因子と共に存する時の態度. 日本細菌学雑誌 22 : 543

- 3) 横田健, 森礼子 (1968) : 温度感受性 R(KM)⁺ 因子と, 温度感受性 R₁₀₀ (CM, TC, SM, SA) 因子との間に生ずる recombinants について. 日本細菌学会雑誌23: 495.
- 4) 山下豊子, 横田健 (1969) : 温度感受性因子に関する研究第5報 T-even phageに対する restriction 第22回日本細菌学会関東支部例会発表.

3) 温度感受性耐性因子に関する研究

T even phageに対する restriction

横田 健,

山下 豊子

研究目的

寺脇ら⁽¹⁾により発見された温度感受性 Rts1 [R(KM)⁺ 因子] の遺伝学的諸性質を検討し, 現在すでに Rts1 因子は宿主菌のF因子による染色体組み換えを阻害しない fi⁻型であり⁽²⁾, fi⁺型の4剤耐性因子 R₁₀₀ (CM, TC, SM, SA) と同一宿主菌に重感染する時は干渉を示さず, また同一宿主菌中に各々が独立して存在する時は, それぞれの温度感受性はお互いに影響を受けないが, 両者の間に生ずる recombinants は, 大部分温度感受性であり, かつ生じた recombinants は Rts1 と同じように phage T4b のみならず, すべての T even phages の E. O. P. を低下させることが知られた⁽³⁾. この Rts1 は指示菌として, E. coli W3630 を用いた場合のみならず, E. coli BS を用いた場合にも認められることを明らかにした⁽⁴⁾. 本報はこの Rts1 による T even phage の restriction が, 現在までに知られている fi⁻ R 因子によるものあるいは P1KC に対する restriction と同じ機構⁽⁵⁾⁽⁶⁾であるか検討を加えた結果を報告したい.

研究方法

(イ) E. coli W3630 : R⁻ を 37°C 18時間培養, それを新鮮 Penassay broth で10倍に稀釀して 37°C で更に 3時間振盪培養した. これに phage T2h, T4b, T4d, T6, P1KC を 10⁶ 程度加え, 37°C 1.5時間振盪後遠心分離し, 上清にクロロホルムを加え, これを phage 液とした. これらの phage の平板効率を (E. O. P.) E. coli W3630 : R⁻, W3630 : Rts1(YA5), W3630 : Rts2(YA13), W3630 : Rts3(YA14), W3630 : Rts1 ; R₁₀₀ (YA6), W3630 : R₁₀₀ (JE948), W3630 : NR73 (YA31), W3630 :

5) 寺脇良郎, 吉川昌之介 (1969) : Temperature sensitive R factor の感染による宿主菌の temperature sensitive growth の発現. 日本細菌学会雑誌24: 142.

6) 横田健, 森礼子 (1969) : 温度感受性カナマクシン耐性因子と他の細胞質遺伝因子の関係. 第42回日本細菌学会総会発表.

7) Lederberg, G., 1947, Genetics, 32: 247-267.

NR73 ; Rts1(YA33), W3630 : NR75-1(YA32), W3630 : NR75-1 ; Rts1(YA34) を指示菌として, 25°C, 37°C, 43°C において測定した. (ロ) E. coli BS strain にこれらの R 因子を transfer したものに対する T even phages の E. O. P. も同様に調べた. (ハ) P1KC の E. coli W3630 : R⁺ に対する E. O. P. を対照として測定した. (二) E. coli W3630 : R⁻, W3630 : Rts1, W3630 : Rts1 ; R₁₀₀ を 25°C で18時間培養, それを新鮮 Penassay broth で10倍に稀釀し, 25°C で 6 時間培養した後, 平板法で T even phages を増殖させた. 密集した plaque のある平板の soft agar を 3 ml のペプトン水にとり, 遠心分離し, 上清にクロロホルムを加えた. この方法により W3630 : R⁻, W3630 : Rts1, W3630 : Rts1 ; R₁₀₀ の細胞中で増殖させた T even phage 液を作った. この phage 液をそれぞれの菌を指示菌として交叉的に 25°C, 37°C, 43°C における E. O. P. を調べた. (ホ) E. coli BS についても同様に測定した. (ヘ) E. coli BS : R⁻, BS : Rts1, BS : Rts1 ; R₁₀₀ を 25°C で18時間培養, それを新鮮 Penassay broth で100倍に稀釀し, 25°C で 2 時間振盪後, 約 1.0 × 10⁷ 個の T6 phage を加え, (即ち Moi 0.1~0.5) 25°C で30分振盪させた後すぐ冷却し, 4°C 10,000 rpm で10分遠心, それの上清を稀釀し, 対数増殖期にある E. coli BS : R⁻ を指示菌として吸着率を測定した. 次でんは冷えた Penassay broth で 1 回洗浄し, 10 ml の Penassay broth に再浮遊させ, その 5 ml を稀釀して対数増殖期にある E. coli BS : R⁻ を指示菌として infective center を測定した. 残りの 5 ml は 25° で1.5時間振盪し, 冷却遠心後, 上清を E. coli BS : R⁻ を指示菌としてそれぞれの増殖の状態を測定した.

研究成績

表1の如く、Rts1はすべてのT even phagesのE.O.P.を25°Cにおいて強く抑制しており、fi⁺の4剤耐性因子R₁₀₀はT even phagesを全然抑制しない。またRts1とR₁₀₀とが重感染したものの、あるいは両者のrecombinant⁽³⁾をもつ菌を指示菌とした場合にはRts1単独の場合と同様強い抑制が認められた。指示菌を37°C以上で培養するとほとんど抑制は解除された。E. coli BSによる抑制は表2の如く、25°CでのRts1および両者のrecombinantのT4bに対する抑制はみられたが、37°Cにおける抑制の解除は少ないようであった。Rts1因子によるT even phageのmodificationは表3、4に

見る如く、Rts1の細胞中で得られたphageも依然としてrestrictionを受けmodificationは受けないものと考えられる。但し、T6 phageをRts1をもつ細胞中で増やす時、やむおえず37°C平板培養温度を用いた。T4b, T4dについても同じような実験を行ったが、modificationを受けるという成績は否定的であった。

T6 phageのE. coli BSによる吸着は、表5に示す如く、Rts1を持っているかないかによって影響を受けない。Moiが0.1~0.5の間になるようにT6 phageをR⁻又はRts1⁺のBS細胞と混合し、25°Cで30分吸着させた後の上清中のphage particle数はすべての投入phageの1/10以下に減少しており、R因子に持たないBSに

表1 Restriction of T even phages by coexisting R factors

R factor	temp °C	Efficiency of plating (E. O. P.)				
		T2h	T4b	T4d	T6	P1KC
W3630: R ⁻	25	1.00	1.00	1.00	1.00	
	37	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
	43	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00
W3630: Rts1	25	1.0×10^{-5}	$>3.9 \times 10^{-9}$	$>2.1 \times 10^{-9}$	2.6×10^{-7}	
	37	0.42	1.3×10^{-2}	7.4×10^{-2}	0.18	3.8
	43	0.61	0.17	0.24	0.21	1.17
W3630: R ₁₀₀	25	0.86	0.84	1.31	0.80	
	37	1.27	0.52	1.31	0.76	2.3
	43	1.33	1.09	0.34	0.53	1.24
W3630: Rts2	25	$>9.1 \times 10^{-8}$	$>3.9 \times 10^{-9}$	$>2.1 \times 10^{-9}$	0.23	
	37	1.08	5.4×10^{-2}	3.7×10^{-2}	0.73	1.03
	43	0.89	0.57	0.16	0.29	1.5
W3630: Rts3	25	$>9.1 \times 10^{-8}$	1.5×10^{-4}	$>2.1 \times 10^{-9}$	2.6×10^{-9}	
	37	1.57	5.2×10^{-3}	1.9×10^{-2}	0.30	0.2
	43	1.22	0.33	2.0×10^{-2}	0.12	6.55

表2 Restriction of T even phage by coexisting R factors E. coli BS×T4b

R factor	Efficiency of plating (E. O. P.)		
	25°C	37°C	43°C
BS:R ⁻	1.00	1.00	1.00
BS:Rts1	$>1.1 \times 10^{-8}$	$>9.1 \times 10^{-5}$	0.63
BS:R ₁₀₀	0.35	0.92	1.70
BS:Rts1;R ₁₀₀	$>5.9 \times 10^{-9}$	1.4×10^{-4}	0.06
BS:Rts2	$>1.1 \times 10^{-8}$	$>9.1 \times 10^{-5}$	0.20
BS:Rts3	0.24	1.80	3.7
BS:Rts1;NR73	$>1.1 \times 10^{-8}$	$>9.1 \times 10^{-5}$	0.57
BS:Rts1;NR75-1	1.1×10^{-7}	$>9.1 \times 10^{-5}$	0.60

表 3 No modification of the T6 phage propagated in the cells of *E.coli* W3630 carring or not carring Rts1

R factor	Temp °C	Efficiency of plating	
		phage T6 (R ⁻)	phage T6 (Rts1)
W3630:R ⁻	25	1.00	1.00
	37	1.00	1.00
	43	1.00	1.00
W3630:Rts1	25	0	0
	37	0.41	0.1
	43	0.34	0.5
W3630:Rts1;R100	25		
	37	1.4	4.6
	43	1.2	2.2

表 4 No modification of the T6 phage propagated in the cells of *E.coli* BS carring or not carring Rts1

R factor	Temp °C	Efficiency of plating	
		phage T6 (R ⁻)	phage T6 (Rts1)
BS:R ⁻	25	1.00	1.00
	37	1.00	1.00
	43	1.00	1.00
BS:Rts1	25	0	0
	37	0.49	0.53
	43	0.91	1.55
BS:Rts1;R100	25	0	0
	37	0.37	0.80
	43	0.68	0.75

表 5 Adsorption of the phage by the cells of *E.coli* BS carring or not carring R factors

Coexisting R factor	No. of phage particles added	No. of bacterial cells mixed	M.O.i	No. of phage remained in sup	Adsorption ratio in %
BS:R ⁻	$7.7 \times 10^7 / \text{cc}$	$1.2 \times 10^9 / 10\text{cc}$	0.064	5.0×10^5	94
BS:Rts1	$7.7 \times 10^7 / \text{cc}$	$3.8 \times 10^8 / 10\text{cc}$	0.20	3.0×10^5	96
BS:Rts1;R100	$7.7 \times 10^7 / \text{cc}$	$1.9 \times 10^8 / 10\text{cc}$	0.41	1.0×10^6	87

吸着される率は94%, Rts1を持つBSに吸着されたT6は96%, Rts1, R₁₀₀の双方をもつものによっては87%のphageが吸着され、3者の間で有意差は認め難い。

これらの実験途上においてRts1をもつ*E.coli* BS細胞とT even phageの濃厚な浮遊液を混合してE.O.P.を調べる時に、しばしばLysis from withoutに似た現象が認められたため、Rts1のT evenによるrestriction

がphageの広い意味でのreplication阻害による既知の現象か、あるいは非常に小さいplaqueを形成するためにみかけ上そうなるのか判別するために、*E.coli* BSを指示菌としてinfective centerの数を調べた。表6に示した如く、平板培養温度を25°Cにしても37°CにしてもT6 phageを吸着したBS:R⁻細胞は、ほとんどすべてinfective centerになり得るが、T6 phageを吸着した

表 6 Maturation of the phage T6 adsorbed by the cells of *E. coli* BS carrying or not carrying R factors

Coexisting R factor	No. of bacterial cells adsorbing T6 phage	No. of infective centers against BS:R		No. of phage after the burst	
		25°C	37°C	25°C	37°C
BS:R ⁻	7.7 × 10 ⁶	5.1 × 10 ⁶	8.2 × 10 ⁶	7.3 × 10 ⁸	1.1 × 10 ⁹
BS:Rts1	7.6 × 10 ⁶	4.8 × 10 ⁴	9.8 × 10 ⁴	1.5 × 10 ⁵	2.2 × 10 ⁵
BS:Rts1;R100	7.8 × 10 ⁶	6.3 × 10 ⁴	7.7 × 10 ⁴	2.0 × 10 ⁴	5.0 × 10 ⁴

Rts1 をもつ細胞あるいは Rts1 ; R₁₀₀ 因子をもつ BS 細胞は $1/100$ 以下しか infective center になり得ない。また R⁻ の BS 細胞に吸着された T6 phage は 90 分の 25°C incubation によって 100 倍以上に増加しているにもかかわらず、Rts1⁺ をもつ細胞に吸着された T6 は同様の保溫によっても 2 倍以下しか増加しておらず、この 2 つの成績を考え合せると、Rts1 による T even phage の restriction は phage 吸着後のどこかの段階を抑制してその replication をおさえるのが原因であって、burst size が小さいために plaque の大きさが極めて小さくなっている。Rts1⁺ をもつ細胞に吸着された T6 は同様の保溫によっても 2 倍以下しか増加しておらず、この 2 つの成績を考え合せると、Rts1 による T even phage の restriction は phage 吸着後のどこかの段階を抑制してその replication をおさえるのが原因であって、burst size が小さいために plaque の大きさが極めて小さくなっている。Rts1⁺ をもつ細胞に吸着された T6 は同様の保溫によっても 2 倍以下しか増加しておらず、この 2 つの成績を考え合せると、Rts1 による T even phage の restriction は phage 吸着後のどこかの段階を抑制してその replication をおさえるのが原因であって、burst size が小さいために plaque の大きさが極めて小さくなっている。Rts1⁺ をもつ細胞に吸着された T6 は同様の保溫によっても 2 倍以下しか増加しておらず、この 2 つの成績を考え合せると、Rts1 による T even phage の restriction は phage 吸着後のどこかの段階を抑制してその replication をおさえるのが原因であって、burst size が小さいために plaque の大きさが極めて小さくなっている。Rts1⁺ をもつ細胞に吸着された T6 は同様の保溫によっても 2 倍以下しか増加しておらず、この 2 つの成績を考え合せると、Rts1 による T even phage の restriction は phage 吸着後のどこかの段階を抑制してその replication をおさえるのが原因であって、burst size が小さいために plaque の大きさが極めて小さくなっている。

考 察

現在 fi⁺ 型の R 因子は調べられた範囲で如何なる phage にも restriction を示さず、fi⁻ 型 R 因子は phage λ, P₁kc, T₁ に対して restriction を示すことが知られている。(吉川⁽⁷⁾, 渡辺⁽⁸⁾) Rts1 は P₁kc, λ に対しては restriction を示さないが、すべての培養温度を 25°C で行った場合、T even phage に対して強い restriction が認められ、37°C 以上になると極めて弱くなるか、あるいはほとんど解除されることは非常に興味深いことである。さらに fi⁻ R 因子による λ および P₁kc 等に対する restriction は一度これらの phage が fi⁻ R 因子をもつ菌の中で増殖した場合 modification を受け、もはや同じ fi⁻ R 因子によっては restriction を受けないことが知られているが(吉川ら⁽⁷⁾, 渡辺⁽⁸⁾), Rts1 因子は Rts1⁺ の細胞中で得られた T even phage をも restriction するため、modification は受けないものと考えられる。又すでに fi⁻ R 因子による λ および P₁kc 等の restriction は、その吸着の段階を阻害せず、菌体内に貫入後、phage DNA が degradation するために起る(吉川ら⁽⁷⁾, 高野ら⁽⁸⁾)ことが知られているが、T6 phage の E. coli BS による吸着もその菌が Rts1 を持っているかいないかにより影響を受けない。これら実験途上我々はしばしば、Lysis from without に似た現象に遭遇った。これらは phage のもつ Lytic enzyme によって真の Lysis from

without が起る場合と、肉眼的には鑑別し難い程小さい plaque が重なり合って起る場合と考えられたため、infective center および吸着後の保温による free phage particle 数を調べた結果から、Rts1 による T even phage の restriction も phage 吸着後のどこかの段階を抑制して、その replication をおさえるのであって、burst size が小さいために肉眼では見えないみかけ上の restriction とは考えられなかった。

結論として、温度感受性 KM 耐性因子 Rts1 は T even phage をすべて restriction する。その restriction は 25°C で顕著であるが、37°C になると極めて弱くなり、43°C ではほとんど認められない。

Rts1 の T even phage に対する restriction は吸着の段階をおさえるために起るのでなく、それ以後の phage replication をおさえるものと考えられる。今後どの段階をおさえるのか検討を進めていきたい。

本研究は昭和44年6月13, 14日に開催された第22回日本細菌学会関東支部例会において発表された。

引用文献

- TERAWAKI, Y., H. TAKATSU, and T. AKIBA. 1967 Thermosensitive replication of a kanamycin resistance factor. J. Bacteriol. 94 : 687-690.
- 横田健, 有泉昇, 金丸佳郎, 森礼子, (1967) : 温度感受性 R 因子に関する研究 第1報 同一宿主菌細胞内に非温度感受性 R 因子と共に存する時の態度 Japan. J. Bacteriol. (in Japanese) 22 : 543
- 横田健, 森礼子 (1968) 「温度感受性 R(KM)^t 因子と、温度感受性 R₁₀₀ (CM, TC, SM, SA) 因子との間に生ずる recombinants について」 Japan. J. Bacteriol. (in Japanese) 23 : 495
- 山下豊子, 横田健, (1969) : 「温度感受性因子に関する研究 第5報 T even phage に対する restriction」 第22回日本細菌学会関東支部例会発表
- 寺脇良郎, 吉川昌之介 (1969) : 「Temparature sensitive R factor の感染による宿主菌の tempara-

- ture sensitive growth の発現」 Japan. J. Bacteriol. 24 : 142
- (6) 高野利也, 静谷裕明, 渡辺力, (1967) : 「F因子およびコリシン因子による phage W-31 の restriction の機序, とくに phage DNA の機能発現の抑制について」 Japan. J. Bacteriol. (in Japanese) 22 : 541
- (7) YOSHIKAWA, M., and T. AKIBA, (1961) : Studies on transferable drug resistance in bacteria.
4. Suppression of plaque formation of phages by the resistance factor. Japan. J. Microbiol. 6 : 121-132
- (8) WATANABE, T., T. TAKANO, T. ARAI, H. NISHIDA and S. SATO, (1966) : Episome-mediated transfer of drug resistance in Enterobacteriaceae. X. Restriction and modification of phages by f^{+} R factors. J. Bacteriol. 92 : 477-486

4) 昭和42年度, 43年度における山梨県下における赤痢菌の薬剤耐性パターンとソンネ赤痢菌のコリシン型別について

金丸佳郎,
山下豊子,
有泉昇
横田健

はじめに

近年わが国で分離される赤痢菌は、菌型としては Sh. sonnei が多く、またその薬剤耐性パターンは多剤耐性菌が優勢であることが知られている。全国平均を見てみると昭和42年度には、ソンネ菌が 88%¹⁾、多剤耐性菌²⁾が 85% 分離されている。山梨県でもこの例にもれず、多剤耐性菌、ソンネ菌の分離率は相当高くなっている。本報には昭和42年および昭和43年山梨県下において分離された赤痢菌の薬剤耐性パターンとソンネ赤痢菌のコリシン型を検討した結果を報告したい。

方 法

イ) 菌の同定法

TSI, SIM, リジン脱炭酸テスト, プドウ糖リン酸ペプトン, SM, シモンズクエン酸, クリストンゼンクエン酸培地による生化学的性状、ためし凝集による抗原分析を型の如く実施した。

ロ) 薬剤耐性検査法

SA, TC, CM, SM, および KMに対する耐性度を散発例については主に、ディスク法により、集発例についてはレプリカ法 (SA 1000 μ g/ml, SM 25 μ g/ml, TC 25 μ g/ml, CM 25 μ g/ml, KM 30 μ g/ml 含有 Mac Conkey 平板使用) で調べた。

ハ) コリシン型別法^{3), 4)}

Sh. sonnei の Abbott & Sannon のコリシン型別法により、わが国の薬剤耐性赤痢研究会コリシン型別研究会の方法によった。指示菌は、埼玉衛生研究所、岡田正次郎博士により分与されたものである。

結 果

イ) 昭和42年度集発例：4件；168株、散発例：8件；27株。昭和43年度集発例：4件；262株、散発例：17件；38株の菌型は表1および表2に示すごとく、散発例の70～80%，集発例の75%が Sh. sonnei によるものであった。

表1 山梨県下で昭和42年, 43年に分離された赤痢菌、菌型(散発例)

菌 型	昭 和 42 年	昭 和 43 年
Sh. sonnei I	24 株	89 %
Sh. flexneri 3a	3 株	11 %
Sh. flexneri 3b		1 株
Sh. flexneri 4a		2 株
Sh. flexneri V. X		1 株
計	24 株	38 株